

NY生活ウーマン

週刊NY生活は、家庭や職場、学校で美しく生きる女性たちを応援します。



電子廃棄物処理場で制作

日米で活動するアーティストの宮森敬子さんは今夏2か月、ブルックリンのゴッナスにあるLESエココロジーセンターの電子廃棄物処理場で滞在型の制作を行った。知人がたまたま同団体のウェブサイトを見て知らせてくれたアーティスト・イン・レジデンス。訪れたコンピュータやテレビなど集まる大きな空間で、周辺は数年後に大開発が予定されている土地と分

かる。そこで、切られる運命にある樹木の拓本を採り倉庫の壁に張り巡らした。9月には同作品とパフォーミングや音響をコラボレーションさせたアートイベント「、それでも、あなたはかがやく」を披露した。二度見捨てられたものの光を当て、ひいては人間が生きていくことへの一瞬間の輝き、希望について表現することを目指した。

もともと獣医になりたか

アーティスト

宮森 敬子さん

つたが、アフリカ旅行中にかかったマラリアが日本で発症して療養を余儀なくされた。この時に絵を描くことに出会い、筑波大学に入らなれて日本画を専攻。「人より少し遅れて大学に入ったから、さまざま講義を貪欲に取った。知識に対する驚きはこの時に養われた」と宮森さん。芸術学部主席で奨学金を得る優等生で「きれいな世界ばかり描いていた」が、人間の悪について考え始めたり毒ガ

ス研究者の調査に同行して中国へ行ったりして、大学院に進んだのに自分の作品を壊して全く創作活動に身が入らなくなった。

転機は、恩師に「作家なんだからこれを出しなさい」と言われ、切り刻んだ自分の作品などを展示した「否定の否定展」。奇しくもそのうちの1点が現代美術に与えられる三木多門賞を受賞した。その副賞でニューヨークに半年来たのが米国との関わり。その後、文化庁在外研修員制度でペンシルベニア大学に1年在籍。その後、フィラデルフィアにスタジオを構え、2010年からはニューヨークにスタジオを持つ。

行き詰った頃に拓本を始めたのは必然だったと今は感じると言う。「木に触って自分が癒された。木との一瞬の出会い、それで周りを包んでいくことで一つの自分の世界を作ることができた」。

2004年からのプロジェクト「つなぐ壁」では、それぞれの人のものと同じ透明ケースに入れて壁を作る。大切な本を600人から借りて、木の拓本でカバーして並べたこともある。「世の中には紛争や対立があるけれど、一瞬でも均いで平和であってほしい」という自分の夢を託しつつ。(小味かおる、写真も)